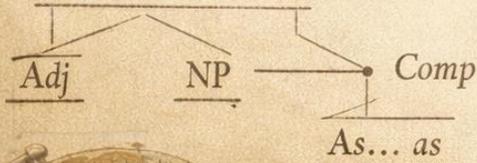


比較構文の本質

The Essence of Comparative Constructions

X is...-er than Y

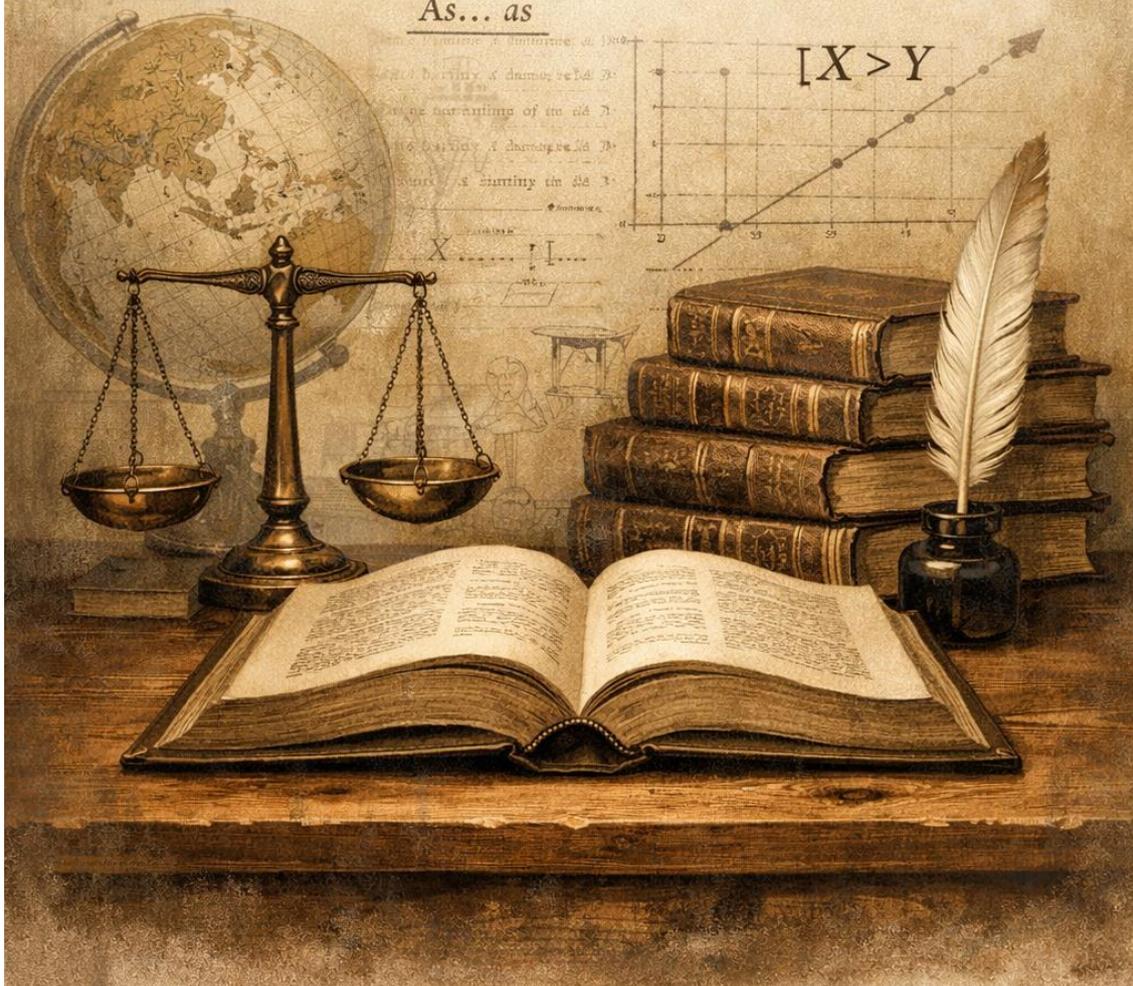


Aquila est fortior quam columba.

Shakespeare is as famous as Cervantes.

As... as

$[X > Y]$



第1章 比較構文(as ~ as / 比較級 ~ than)の構造と読み方

1. as ~ as と 比較級 ~ than の基本的な違い
2. 比較構文の前提——文法的に対等な比較
 - 2-1. It is colder here than Tokyo. が誤りである理由
 - 2-2. 注:会話での than Tokyo(=than (in) Tokyo)
3. as と than の品詞と構造的役割——後ろの as/than は接続詞
4. He looks younger than he is——二文統合で捉える
5. 省略・代用が起こる理由——内容語の繰り返し回避
 - 5-1. taller than his brother (is)(tall の省略)
 - 5-2. He is younger than he looks. の読み違い注意
6. than if ~ / as when ~——比較基準の「状況化」
7. as/than の後の構造①——代用(that / those / do)
8. as/than の後の構造②——省略(意味回復と骨格保持)
9. as/than の後の構造③——倒置(文末焦点)
10. as ~ as の意味の転び方——皮肉・否定的含意
11. 比較構文を読むときの基本姿勢——構造を復元して読む

第2章 クジラ構文(A is no more B than C is D)構文の構造と読み方

1. クジラ構文の本質——比較ではなく比喩
2. no more の意味——「差がゼロ」の強い否定
3. than の性質——前置詞ではなく接続詞
4. than 節に not を置けない理由
5. than の前後で意味が成立する仕組み
6. 省略・代用・倒置が起こりやすい理由
7. no less ... than——強い肯定
8. no more ... than と not more / not less ... than——比喩否定と文否定
9. クジラ構文の読み方——構造を復元する

第3章 The 比較級 the 比較級 構文(比例構文)

1. 基本発想——比例関係の二文統合
2. これは「比較」ではなく「比例」である

3. 前の the と後ろの the——役割の違い
4. 前半・後半は独立した完全文である(文型の確認)
5. 比較級が文頭に出る理由——倒置の正体
6. The 比較級 the 比較級 は「二文統合構文」である
6+. be 動詞が省略されやすい理由
7. all the 比較級 because ~——理由×程度の結合
8. 文法問題にチャレンジ——interest の形と文型(SVC / SVOC / SVO)

1 比較構文(as ~ as / 比較級 ~ than)の構造と読み方

1. as ~ as と 比較級 ~ than の基本的な違い

My baby is as tall as yours.

私の赤ちゃんはあなたの赤ちゃんと同じ背の高さだ。

as ~ as は、二つの対象を同じ程度で比べるための比較構文であり、どちらが優れているか、あるいは劣っているかを述べるものではない。ここで示されるのは「差がない」という事実であり、評価の方向は含まれない。これに対して、比較級 ~ than は、二つの対象の間に差があることを示し、一方が他方よりも「より~である」ことを表す比較構文である。意味の方向は異なるが、両者はいずれも「比較」という同一の仕組みに基づいて成立している。たとえば My baby is as tall as yours. は「私の赤ちゃんは、あなたの赤ちゃんと同じ背の高さだ」という意味であり、「私の赤ちゃんは背が高い」と言っているわけではない点に注意する。

2. 比較構文の前提—比較対象は文法的に対等

It is colder here than in Tokyo.

ここは東京より寒い

比較構文では、比較される二つの要素が文法的に対等であることが前提となっており、同じ種類・同じ働きをもつ語句同士が比較される。たとえば It is colder here than in Tokyo. では、here と in Tokyo はいずれも「場所」を表す副詞的表現であり、副詞と副詞の比較になっているため文法的に対等である。一方、It is colder here than Tokyo. のように in を欠くと、here(副詞)と Tokyo(名詞)を比較することになり、文法的に対等ではないため誤りとなる。比較構文では、語の形ではなく、その文法的機能をそろえることが不可欠である。

注：実際の英語(特に会話)では、than Tokyo が than (in) Tokyo のように省略的に用いられることがある。これは文法的に異なるものを比較しているのではなく、here と in Tokyo という「場所」を表す副詞的表現の比較において、意味が明らかな in が省略された結果である。したがって、than が前置詞のように見える場合でも、文法的には後ろに in Tokyo を含む構造が省略されていると考えるのが自然である。

3. as と than の品詞と構造的役割…後ろの as と than は接続詞である

This room is as quiet as the library is.

この部屋は、図書館が静かなのと同じくらい静かだ。

as ~ as 構文において、前に置かれる as は副詞として働き、形容詞や副詞の程度を示す役割を担う。一方、後ろに置かれる as は接続詞であり、比較の基準となる節を導く。そのため、後ろの as の後には、本来は主語と動詞を含む完全な文が続く構造になっている。比較級 ~ than 構文における than も同様に接続詞であり、比較の基準となる節を導く語であるため、than の後にも本来は主語と動詞を含む完全な文が続く構造になっている。

4. He looks younger than he is に見る二文統合の発想

He looks younger than he is.

彼は、実際の年齢よりも若く見える。

He looks younger than he is. は、He looks young. と He is young. という二つの文が一つにまとめられてできた比較構文である。論理的には He looks younger than he is young. となるが、同じ内容語 young を繰り返すことを避けるため、後半の young が省略され、現在の形が成立している。より文法的に言えば、than 節の補語(young)が前半から復元できるので省略されている。

5. 省略・代用が起こる理由——内容語の繰り返し回避

—— He is younger than he looks. の読み違いに注意 ——

実際の英文では、as 以下や than 以下で、省略や代用が起こることが多い。これは英語には、同一文中で同じ内容語(名詞・動詞・形容詞・副詞)を不必要に繰り返すことを避けるという原則があるためである。比較構文では、前半ですでに内容が示されているため、後半で同じ内容語をそのまま繰り返すことを避け、省略や代用が行われる。前半から後半の内容が一つに決まって復元できる(=意味が回復できる)ため、わざわざ言い直さない方が自然だからである。

たとえば He is taller than his brother is tall. は意味的には理解できるが、tall は前半ですでに示されているため、実際には He is taller than his brother is. や He is taller than his brother. のように、内容語 tall が省略された形が用いられる。同様に He is younger than he looks. は「彼は見た目よりも若い」という意味であり、「彼は彼が見るよりも若い」という意味ではない。

6. than if ~ / as when ~ による比較基準の仮定化

The task is easier than if it were done by hand.

その作業は、もし手作業で行われたとした場合よりも簡単である。

She smiled as happily as when she was a child.

彼女は、子どもの頃と同じくらい幸せそうにほほえんだ。

The task is easier than if it were done by hand. は、The task is easier than the task would be easy if it were done by hand. という構造をもとに、内容語の繰り返しを避けて the task would be easy が省略されたものである。一方 She smiled as happily as when she was a child. は、She smiled as happily as she smiled happily when she was a child. をもとに、she smiled happily が省略され、when 節が比較基準として残されている。このように than if ~ や as when ~ は比較構文の特殊形ではなく、比較基準を「状況」として明示したにすぎない。

7. as および than の後の構造①代用…名詞要素、動詞要素の繰り返しの回避

The climate of Osaka is warmer than that of Nagano.

大阪の気候は、長野の気候よりも温暖だ。

The houses in this area are larger than those in the old town.

この地域の家は、旧市街の家よりも大きい。

比較構文では、同じ名詞句や述語の繰り返しを避けるために代用語が用いられる。単数名詞の代用には **that**、複数名詞の代用には **those** が用いられる。The climate of Osaka is warmer than that of Nagano. は、The climate of Osaka is warmer than the climate of Nagano is warm. から、名詞句 the climate の繰り返しを避けて **that** が用いられ、is warm が省略された形である。同様に The houses in this area are larger than those in the old town. では、the houses の繰り返しを避けて **those** が用いられ、are large が省略されている。

また、動詞句の代用には **do** が用いられる。She studies harder than he does. は、She studies harder than he studies. において、studies の繰り返しを避けるために **does** が用いられたものである。

8. as および than の後の構造②省略…重複部分の省略

It is as hard to explain this rule as it is to remember it.

この規則を説明するのは、それを覚えるのと同じくらい難しい。

比較構文では、意味的に重なる内容語が省略される一方で、文構造を支える要素は保持される。young は省略しても意味が回復できるが、he を省略すると比較対象が不明になるため、he is は残されている。比較構文では、「意味の重複部分を省き、骨格を残す」という原則が一貫して働いている。

この原則は It is as hard to explain this rule as it is to remember it. のような構文にも当てはまる。この文は It is hard to explain this rule. と It is hard to remember it. という二文を統合したものであり、論理的には It is as hard to explain this rule as it is hard to remember it. となるが、同じ内容語 hard を繰り返すことを避けるため、後半の hard が省略されている。一方で、文構造を明確に保つため、形式主語 it と動詞 is は保持されている。この点は He looks younger than he is. において young は省略されるが he is が残されるのと同じ原理である。つまり省略の基準は「言っはいけない」ではなく、「言わなくても一つに復元できるかどうか」である。

9. as および than の後の構造③倒置…文末焦点(end focus)

It is as hard to explain this rule as it is to remember it.

彼は、弟(兄)よりも背が高い。

No one knows her better than does her mother.

彼女のことを母親ほどよく知っている人はいない。

英語には、文の最後に最も重要な情報を置くという文末焦点の原則がある。比較構文では、後半の as 以下・than 以下が比較の基準となるため焦点になりやすく、その結果、語順の調整や倒置が起こることがある。He is taller than is his brother. は、He is taller than his brother is tall. から、tall を省略したうえで、比較基準 his brother を文末に置いて強調したものである。No one knows her better than does her mother. も同様に、No one knows her better than her mother knows her. の knows her を繰り返しを回避するために、代動詞 does にした↑で、文末焦点のために倒置(助動詞 S)が用いられている。ただし、こうした倒置は日常会話の普通の形というより、文章語・修辭的な言い方として出やすい。

10. as ~ as における意味の転び方への注意

He is as intelligent as a flea.

彼はノミと同じ程度の賢さである。(=彼はノミと同様に賢くない)

as ~ as は中立的に「同程度」を表す構文だが、比較対象によっては文全体が否定的・皮肉的な意味になることがある。intelligent は肯定的な形容詞だが、He is as intelligent as a flea. のように、比較対象が知性をもたない存在である場合、実際の意味は「彼はほとんど賢くない」となる。形容詞の意味だけで判断せず、比較対象の性質を考慮する必要がある。

11. 比較構文を読むときの基本姿勢

as ~ as や比較級 ~ than は、単なる決まり文句ではなく、二つの文を一つにまとめた結果として生じる構文である。この発想で元の二文に戻して考えると、省略・代用・倒置、さらには意味の転び方まで一貫して理解できる。比較構文を正確に読むためには、表面の形を暗記するのではなく、構造を復元して読む姿勢が不可欠である。つまり、比較構文は「一文の中で比較を表す」構文だが、その一文の中には「比べるための二つの内容(命題)が統合されている」と捉えると、文法現象がきれいに説明できる。

2 クジラ構文の構造と読み方 …比較の形を借りた否定の比喩表現

1. クジラ構文の本質——「比較」ではなく「比喩」である

A whale is no more a fish than a horse is (a fish).

馬が魚でないのと同様に、クジラも魚ではない。

いわゆるクジラ構文と呼ばれる *A is no more B than C is D* の形は、比較級 *more* を含むため、一見すると比較構文の一種のように見える。しかし、この構文が行っているのは「どちらがより～か」を比べることではない。クジラ構文の本質は、誰もが知っている明白な否定事実をたとえとして用い、それと同程度であること、すなわち差がないことを示す比喩表現にある。

A whale is no more a fish than a horse is (a fish).

この文で話し手が利用しているのは、「馬が魚であるはずがない」という、聞き手と共有された常識である。その否定事実を比喩として借り、「それと同じ程度で成り立たない」という意味で、クジラも魚ではないと述べている。ここでは比較は行われておらず、否定を別の否定によって支える比喩構造が成立している。

2. *no more* が表す意味——「差がゼロ」であるという強い否定

クジラ構文の中心にある *no more* は、弱い否定や部分否定を表す語ではない。*no* は「ゼロ」を表し、*more* は本来「差」を示す語であるため、*no more* は「差がゼロであること」、すなわち「同じであること」を意味する。ただし、ここで言う「同じ」とは「同じように成り立たない」という意味である。

この *no more* の感覚は、*No more Hiroshimas.* (これ以上ヒロシマを繰り返してはならない) や *No more guns.* (これ以上銃はいらない) に見られる *no more* と共通しており、断固とした否定を宣言する語感をもっている。クジラ構文では、否定は最初から確定しており、その否定に一切の差がないことが示されている。

3. *than* の文法的性質——前置詞ではなく接続詞

クジラ構文における *than* は前置詞ではなく接続詞である。したがって、*than* の後には本来、主語と動詞を含む完全な文が続く構造が想定されている。

A whale is no more a fish than a horse is (a fish).

「馬が魚でないのと同様に、クジラも魚ではない。」

ここで *a fish* が省略されているのは、意味が明白であるためであり、文法的に不要だからではない。この点は、*as ~ as* 構文において後半の *as* が接続詞であることと完全に対応している。

4. than 節の中に not を置けない理由

クジラ構文では、否定は no more によって主節で完結している。than 以下は、その否定を支えるための比喩の基準を示す部分であり、新たに否定を作る場所ではない。そのため、than 節の中に not を置くことはできない。

× A whale is no more a fish than a horse is not.

この形が不自然になるのは、than 節が否定を提示する場ではなく、否定の確かさを示す場だからである。

5. than の前後で意味が成立する理由

クジラ構文では、than の前後がそれぞれ独立して意味をもつ。

A whale is no more a fish. という前半だけで、「クジラは魚ではない」という否定はすでに確定する。一方、than a horse is (a fish). という後半だけを見ても、「馬が魚であるはずがない」という明白な否定が読み取れる。この二つを並べることで、後半の否定が前半の否定を比喩として補強している。

6. 省略・代用・倒置が起こりやすい理由——例文で理解する

He is no more satisfied with the result than his parents (are) with his efforts.

彼がその結果に満足していないのと同様に、彼の両親も彼の努力に満足していない。

You can solve this problem no more easily than can those who lack basic training.

基礎的な訓練を欠いている人たちと同様に、あなたもこの問題を簡単に解くことはできない。

クジラ構文では、省略・代用・倒置が非常に起こりやすい。これは構文が特殊だからではなく、than が接続詞であり、構文全体が二つの文を一つに統合した結果として成立しているからである。英語には、同一文中で同じ内容語(名詞・動詞・形容詞・副詞)を不必要に繰り返さないという原則がある。

He is no more satisfied with the result than his parents (are) with his efforts.

この文は He is no more satisfied with the result than his parents are satisfied with his efforts. という構造をもとに、後半の satisfied が省略されたものである。

倒置も同じ原理で起こる。

A whale is no more a fish than is a horse.

「馬が魚でないのと同様に、クジラも魚ではない。」

さらに助動詞を伴う場合も同様である。

You can solve this problem no more easily than can those who lack basic training.

「基礎的な訓練を欠いている人たちと同様に、あなたもこの問題を簡単に解くことはできない。」

7. no less ... than——否定ではなく強い肯定

He is no less a hero than his father was.

彼は父親に劣らぬ英雄である。

no more ... than が強い否定を表すのに対し、no less ... than は強い肯定・評価を表す構文である。

He is no less a hero than his father was.

ここでは「父親が英雄である」という評価を前提に、その評価と同じ程度で彼も英雄であることが示されている。形は似ているが、意味の方向は正反対である。

8. no more ... than と not more / not less ... than

He is no more intelligent than his brother.

彼は兄と同様に賢くない。

He is not more intelligent than his brother.

彼は兄よりも賢いわけではない。

He is no more intelligent than his brother.

彼は兄と同様に賢い。

He is not less intelligent than his brother.

彼は兄より劣って賢いわけではない。

He is no more intelligent than his brother. は、「彼は兄より賢い」という意味でも、「兄より劣っている」という意味でもない。この文が言っているのは、兄が賢くないという否定を前提にし、その否定と同じ程度で彼も賢くない、ということである。これは評価の大小を比べている文ではなく、「賢いという評価が成り立たない」という否定を、別の明白な否定によって支えている比喩構造である。したがって、この構文では比較は行われておらず、否定はすでに確定している。

これに対して He is not more intelligent than his brother. は、構文も意味もまったく異なる。これは Not [He is more intelligent than his brother.]

と考えることができ、「彼が兄より賢いとは言えない」という意味になる。否定されているのは「兄より賢い」という比較判断そのものであり、兄と同程度である可能性や、むしろ劣っている可能性は排除されていない。ここでは否定は文全体にかかっており、評価そのものは確定していない。

同様に *He is not less intelligent than his brother.* も文否定である。この文は *Not [He is less intelligent than his brother.]* という構造をもち、「兄より劣って賢いとは言えない」という意味になる。したがって、「同程度か、それ以上に賢い可能性」が含意されるが、それは *no more ... than* のように否定を比喩で確定する表現ではない。

以上をまとめると、*no more ... than* は「否定を前提にし、その否定を比喩で確定する構文」であり、比較の形を借りながら実際には比較を行っていない。一方、*not more ... than* や *not less ... than* は、比較文そのものを否定する文否定であり、意味の幅を残す表現である。この違いを意識すれば、形が似ているこれらの構文を、意味と構造の両面から正確に読み分けることができる。

9. クジラ構文の読み方——構造を復元する

クジラ構文は、特別な訳語を暗記するための構文ではない。比較構文の形を借りながら、否定を比喩によって論理的に強化する、きわめて英語らしい表現である。表面の語順や訳語に頼るのではなく、「どの否定が、どの明白な否定によって支えられているのか」を構造として復元して読むことで、意味は自然に立ち上がってくる。

3 The 比較級 the 比較級 構文の構造と読み方

—— 比例関係にある二つの完全文を統合した構文 ——

1. The 比較級 the 比較級 の基本発想

The colder it is getting, the more I want to stay at home.
 だんだん寒くなるにつれて、家にいたい気持ちがますます強くなる。

The 比較級 the 比較級 構文は、「二つの事柄が比例関係にある」ことを表す構文である。たとえば、It is getting colder. と I want to stay at home very much. という二つの独立した文があるとき、「寒くなるにつれて、家にいたい気持ちが強くなる」という関係が自然に読み取れる。この二文を比例関係として一文にまとめたものが、The colder it is getting, the more I want to stay at home. である。この構文は、新しい意味を付け足しているのではなく、二つの完全文の関係性を一文で可視化しているにすぎない。

2. この構文は「比較」ではなく「比例」を表す

The 比較級 the 比較級 は、as ~ as や 比較級 ~ than のように二者の優劣を比べる構文ではない。ここで示されているのは、「A が強まれば、それに応じて B も強まる」という比例関係であり、構文の本質は比較ではなく、変化量どうしの連動にある。

3. 前の the と後ろの the の役割の違い

The 比較級 the 比較級 構文に現れる二つの the は、同じ形をしているが、文法的役割は異なる。前半の the は意味的に接続詞的に働き、「～すればするほど」という条件・比例を導く役割を担っている。この点で as に近い性質をもつ。一方、後半の the は比較級にかかる副詞であり、「その程度だけ」「それに応じて」という意味を表す語である。別の言い方をすれば、この構文全体は副詞節と主節から成り立っている。

4. 二つの節はいずれも独立した完全文である

The colder it is getting, the more I want to stay at home. という文は、語順が特殊に見えるものの、前半・後半のどちらも独立した完全文として成立していることが、この構文を理解するうえで最も重要な点である。前半の The colder it is getting は、The colder(C) + it(S) + is getting(V)という形をとり、基礎となる文は It is getting colder. である。これは「だんだん寒くなってきている」と

いう意味をもつ第 2 文型(SVC)の完全文であり、比較級 colder が文頭に移動しているだけで、文型そのものは完全に保持されている。

後半の the more I want to stay at home は、the more(M) + I(S) + want(V) + to stay at home という構造をもち、基礎となる文は I want to stay at home more. である。こちらは第 3 文型(SVO)の完全文であり、more は動詞 want の程度を表す副詞として機能している。つまりこの構文は、It is getting colder. と I want to stay at home more. という二つの独立した完全文が、「寒さの増加」と「欲求の増加」という比例関係にあるため、一文に統合されたものである。

5. 比較級が文頭に出る理由——倒置の正体

The 比較級 the 比較級 構文では、比較級が主語より前に出るため語順が特殊に見えるが、これは無秩序な倒置ではない。比較級そのものを節の焦点として提示するための配置であり、前半では「どれだけ寒くなるか」、後半では「どれだけ～したいか」がそれぞれ節の意味の中心になる。そのため比較級が文頭に置かれているのであって、この倒置によって文型が壊れているわけではない。

6. The 比較級 the 比較級 は「二文統合構文」である

この構文は、特別なイディオムや暗記項目ではない。本質的には、二つの完全文が存在し、それらが比例関係にあるために一文にまとめられているだけである。The 比較級 the 比較級 は、英語が論理関係を語順と構造によって表現する際の、最も洗練された構文の一つである。

6+. The 比較級 the 比較級 では be 動詞が省略されやすい理由

The longer the delay, the greater your responsibility.
遅れが長引けば長引くほど、あなたの責任は重くなる。

The 比較級 the 比較級 構文では、be 動詞が非常に高い頻度で省略される。これは口語的な省略ではなく、この構文の情報構造から必然的に生じる現象である。

The longer the delay, the greater your responsibility. この文は The 比較級 the 比較級 構文の典型例であり、The delay is longer. と Your responsibility is greater. という二つの完全文が、「遅れの増加」と「責任の増加」という比例関係にあるため、一文に統合されたものである。

この構文では be 動詞が非常に高い頻度で省略される。

この省略は口語的な省略ではなく、構文上の必然である。第一に、be 動詞は意味内容を担わない機能語であり、構文の意味的焦点は比較級にある。第二に、The 比

較級 the 比較級 構文では、比較級が文頭に置かれた焦点要素となり、主語や be 動詞は背景情報に退く。第三に、この構文自体が二文統合の結果として成立しているため、統合の過程で重複する要素が自然に削減される。

重要なのは、この省略によって文型が崩れているわけではないという点である。省略されているのは be 動詞という機能語だけであり、比較級・主語・比例関係という構造の骨格は完全に保持されている。したがって、be 動詞が見えない場合でも、「欠けた文」と捉えるのではなく、比較級を中心とする比例構文として読む必要がある。

8. all the 比較級 because ~ の構造と意味

I admired him all the more because he admitted his mistake.

彼が自分の過ちを認めたがゆえに、私はいっそう彼を尊敬した。

The 比較級 the 比較級 と同じ思想は、all the 比較級 because ~ にも見られる。この構文は、比較級を用いて「理由」と「程度」を直接結びつけ、「~であるという理由によって、その分だけいっそう~だ」という意味を表す。I admired him all the more because he admitted his mistake. では、all the more が程度を表し、その増分が because 以下の理由節によって規定されている。ここで用いられている the は定冠詞ではなく副詞であり、The 比較級 the 比較級 構文の後半に現れる the と同質のものである。

9. 文法問題にチャレンジ——The 比較級 the 比較級 と文型の見極め

以下の空所に、意味が通じるように、interest, interested, interesting のいずれかを入れなさい。それぞれ一回しか用いることはできない。

a. The harder he studied Japanese literature, the more () he became in it.

b. The harder he studied Japanese literature, the more () he found it.

c. The harder he studied Japanese literature, the more () he showed in it.

ここで、The 比較級 the 比較級 構文の理解をさらに確かなものにするため、文法問題に挑戦してみる。次の三文はいずれも同じ構文を用いているが、後半節の文型が異なるため、interest の形も変化する。

a. The harder he studied Japanese literature, the more interested he became in it.

この文では interested が正解である。後半節の基礎となる文は he became interested in it(「彼はそれに興味を持つようになった」)であり、become C の SVC 構文である。interested は主語 he の状態変化を表す補語として用いられている。

b. The harder he studied Japanese literature, the more interesting he found it.

この文では interesting が正解である。後半節は find O C の SVOC 構文であり、基礎となる文は he found it interesting(「彼はそれを興味深いと感じた」)である。目的語 it を説明する補語として interesting が用いられている。

c. The harder he studied Japanese literature, the more interest he showed in it.

この文では interest が正解となる。後半節は show O の SVO 構文であり、基礎となる文は he showed interest in it(「彼はそれに関心を示した」)である。この文では interest は名詞として用いられている。

以上の三文はいずれも The 比較級 the 比較級 構文であるが、後半節の文型がそれぞれ SVC・SVOC・SVO と異なるため、同じ語根 interest であっても、形容詞(interested / interesting) や 名詞(interest) という異なる形が選択されている。

この点を押さえることで、The 比較級 the 比較級 構文は「語形の暗記」ではなく、「文型に基づく必然的な選択」として理解できるようになる。